夢の初舞台

都城ミュージカルクラブ初公演

都城ミュージカルクラブの初公演が8月21日・22日、ウエルネス交流プラザで開催されました。作品は、脚本から音楽に至るまですべてがオリジナル作品。第一期生の14人は、演劇を初めて体験する人も多く基礎練習に時間をかけて初舞台に臨みましたが、リラックスした様子で楽しそうに演じていました。観客席で大きな拍手を送っていた小久保幸乃さん（鷹尾五丁目）は「すべてオリジナルだと聞いて驚きました。ストーリーも面白く、次回公演も楽しみです」と嬉しそうに話していました。

復興への夏祭り 7万人がにぎわう

きばっど！ 都城まつり

口蹄疫被害からの復興支援イベント「きばっど！ 都城まつり」が8月22日、市内の中心市街地で開催されました。オープニングで高崎麓小学校の児童らが畜産農家への応援メッセージを発表。続いて、殺処分された牛と同数の238個の風船を空に放ち復興を誓い合いました。会場には多くの家族連れらが訪れ、ステージイベントを見たり都城産の牛や豚などの焼き肉を食べたりして祭りを楽しみました。実行委員長の福島宏さんは「元気を取り戻すきっかけにしたい」と復興を願っていました。

夏休みの自由研究はこれで完ぺき！

こども植物観察会

夏休みも残りわずかとなった8月22日、早水公園内の緑の相談所でこども植物観察会が行われました。子どもたちに緑への関心を持ってもらおうと、毎年夏休みに2回シリーズで開催。1回目に押し葉標本の作り方を学んだ子どもたちは、その後に出来上がった植物の標本を持ち寄り、指導員に名前を聞いてラベルに書き込み、標本を完成させていました。初めて自由研究で植物採集した豊丸七海（ななみ）さん（祝吉小4年）は「ピンセットで画用紙に貼り付けるのが楽しかった」と笑顔を見せていました。

限界（集落）なんて言わせない

いきいき集落認定証授与式

住民が自らの手で地域の活性化に取り組んでいる吉之元町の折田代集落（田畑利紀館長、150戸）がいきいき集落に認定され8月26日、認定証の授与式が行われました。折田代自治公民館で行われた授与式では東国原知事が「今後も地域の活性化のために知恵と汗を出し頑張ってください」と住民を激励し、認定証といきいき集落と書かれたのぼりを手渡しました。その後行われた座談会では、過疎や高齢化に悩む集落の活性化について活発な意見交換が行われました。

長寿の秘訣は唐芋と半熟卵

百歳以上長寿者訪問

敬老の日を前に9月6日、市長や副市長らが市内の100歳以上の長寿者宅を訪問し、長寿を祝いました。100歳以上の長寿者は、県内最高齢の胡摩ケ野（ごまがの）スミエさん（山田町、110歳）を含め88人。この日長峯市長は市内の老人ホームを訪れ、胡摩ケ野さんに祝い状や都城焼窯元から寄贈された湯飲み茶碗などを贈りました。得意な歌を聞かせてくれた胡摩ケ野さんに市長が、来年も来ますからねと声を掛けると「遠いところをありがとうございます」と手を合わせて感謝していました。

再開に生産者ら　ホッ！

子牛競り市再開

県内の口蹄疫発生を受け4月から中止となっていた子牛競り市が、9月8日から11日までの4日間、家畜市場で行われました。競りに先立ち長峯市長が「今後も品質のいい子牛を全国に出荷していきましょう」とあいさつ。その後、来場者らは市内で殺処分された家畜のために黙とうを捧げました。5月に出荷予定だった約1、900頭が競りに出され競り落とされた子牛の平均価格は、前回より約1万7、000円高い約40万9、000円と思っていた以上の高値に生産者らはほっとした様子でした。

主役は私たち！ 新たな取り組み始動

まちづくり協議会設立総会

地域住民が主体となってさまざまな意見を出し合い、住みよいまちづくりを目指すまちづくり協議会の設立総会が、市内の6地区で行われました。9月3日に設立された五十市地区では、自治公民館連絡協議会や体育協会、鷹尾商工振興会など団体の代表者48人が出席。協議会設立看板の除幕式を行い、新たなまちづくりへの取り組みをスタートさせました。新しく協議会会長に就任した吉岡隆宏さん（鷹尾五丁目）は「みんなで力を合わせて頑張っていきましょう」と力を込めていました。

見応え十分の芸術作品

第57回都城市美術展

都城圏域のアマチュア芸術家の作品が一堂に会する都城市美術展が、9月10日から26日まで市立美術館で開催されました。絵画、工芸、写真、書の4部門で入選した333点の作品を展示。第1部門で特選を受賞した竹田ヒサ子さん（末吉町）は「昭和29年ごろ住んでいた神戸の街並みを思い出しながら描きました」と懐かしそうに話していました。各部門の大賞受賞者は次のとおり。第1部門鶴山美彩紀（みさき）さん、第2部門大迫厚二さん、第3部門木佐貫弘志さん、第4部門曽原一恵（かずえ）さん。

人の風景

第57回日本伝統工芸展に入選

中島高穂さん

全国の人形や陶芸、漆芸などを審査する日本伝統工芸展（日本工芸会主催）に人形師の中島高穂さん（本名敬明・高崎町大牟田・54歳）が入選を果たしました。今回入選した「霧島の逆鉾」は、人形に高千穂峰にある天の逆鉾を持つ若き勇士を形にした作品。人形を作り始めて27年目で初の日本伝統工芸展出品・入選に対して「光栄です。うれしく思っています」と満面の笑みを浮かべる中島さん。宮崎県の神話や芸能を題材とし、粘土を使って埴輪を現代風にアレンジした「神代人形」を確立し、審査員から「宮崎に生まれ、宮崎に住んでいるからこそ出来た独自の作風」と評価されました。

瓦工場の3代目として生まれた中島さんが人形作家として歩み始めたのは、博多人形師の義父から勧められたのがきっかけ。初めは鬼瓦の制作の道を進むはずでしたが「人形は奥が深い。自分がイメージしたそのものを作品となって表現できる」と魅力に引き込まれ作品を作り始めました。

「宮崎らしさ」を表現したいと考えていた中島さんは、埴輪を取り入れた人形を作ることにたどり着き、平成4年に埴輪シリーズを完成。こうした人形作りの情熱が認められ今年3月に地域に貢献する優秀な技術を持つ工芸品製作者に県が贈る「みやざきの匠」にも選ばれました。

大人から子どもまで多くの人に作品を見てもらおうと工房内に人形を設置し「今後も宮崎らしさを追求して、見てもらった人たちに感動してもらえるような人形を作りたい」と力を込めていました。

都城讃歌

【ありがとう都城】

乗峰　潤三さん

乗峰 潤三
（のりみね じゅんぞう）

◎プロフィル

昭和32年、山之口町生まれ。都城泉ケ丘高校、宮崎大学出身。東京大学農学部獣医学科博士課程修了。ワシントン州立大学獣医微生物病理学部にて牛の免疫学を研究中。

母から聞いた話で、ある日兄が木に登っている時、私が下から「東京が見ゆいかよ」と聞くと、兄は「うんにゃ、東京は見えんどん、くわばい（桑原）が見ゆっど」と答えたそうです。先日久しぶりに山之口の実家に帰り、シリア人の妻とアメリカで育った娘に自分が育った都城を見せようと桝安牧場に上り、そんな兄との会話を思い出しながら、都城盆地を見下ろしました。盆地に広がる田園風景と、霧島連山は昔のままでした。三股のめがね橋に行ってみると、少年たちが昔の様に飛び込みを楽しんでいました。泳いでみるとやっぱり水は冷たかった。古い友人たちや、昔お世話になった人たちと再会するたびに人の温かさは何も変わっていないなと思いました。都城という土地柄が、都城という家族を作っているのだと実感しました。母のおかげで、アメリカに帰る頃には、妻も娘も都城弁が少し分かるようになったようです。私も53歳になり、日本語を使うことすらあまり無い生活を送る中、都城の言葉はやっぱり私の言葉です。その言葉を使う家族がいる限り、帰って来ればまたいろんなばか話ができるという安堵感があります。都城の土地、人、言葉、そういうものがいつも自分の中にあってどこへ行っても生きていけるという自信を与えてくれているような気がします。

学校へ行こう

都城聖ドミニコ学園高等学校

下長飯町881　☎39-1303

◎学校のシンボル
「マリア像」
「聖母よ、すべての人々に喜びと光をまくことができますように」という言葉が刻まれています

真理と愛のドミニコ学園

都城聖ドミニコ学園生徒会

都城聖ドミニコ学園高等学校は、カトリックミッションスクールで、県内唯一の女子高であり、社会の信頼に応えられる女性へ成長するための環境が整っています。例えば朝の祈りの中に「報いを期待することなく奉仕する」という個所があります。ここには、報いを求めず優しさや思いやりを周りの人に与えることのできる女性に成長するという思いが込められています。これらを毎日唱えることで周りを見ることができるようになります。また、海外の恵まれない子どもたちのために毎月１００円募金をし、そうした子どもたちに手を差し伸べる事の大切さを学んでいます。

このように、ドミニコ学園では、心から美しい女性へと成長するために、心の教育にも力を注いでいます。

そのほか、体育祭の準備などの力仕事も自分たちで行い、協力することの大切さや判断力を自然に身につけることができます。また、交換留学制度もあり、国際性と英語力の育成を図っています。私たちの誇りであるドミニコ学園がより活気づくために、私たち生徒会が先頭に立ち、多くの企画を実行したいと考えています。